

MACROCOSM



CONTENTS

- 2 国際青年育成交流事業第20回記念式典
- 3 国際青年育成交流事業(国際青年交流会議)
- 4 国際青年育成交流事業(地方プログラム)
- 5 第40回「東南アジア青年の船」事業記念式典・レセプション
- 6 第40回「東南アジア青年の船」事業(国内プログラム)
- 8 第20回青少年国際交流全国フォーラム
日本青年国際交流機構第29回全国大会(三重大会)基調講演録
- 12 国際理解教育支援プログラム
- 13 IYEO自主活動サポート助成金制度(チャレンジ・ファンド)を活用した活動
 - ・ 第2回J-SSEAYP
 - ・ 第39回「東南アジア青年の船」事業既参加青年による事後活動

マクロコズム

平成25年度「国際青年育成交流」事業 国際青年育成交流事業第20回記念式典

日程：9月26日（木）ホテルニューオータニ東京

平成6年度に皇太子同妃両殿下の御成婚を記念して開始された「国際青年育成交流」事業が20回目を迎えた今年、「国際青年交流会議」において皇太子同妃両殿下の御臨席を賜り、「国際青年育成交流事業第20回記念式典」を行いました。



皇太子殿下によるおことば



第20回記念式典に出席される皇太子同妃両殿下



国際青年育成交流事業20年を振り返るオープニング映像



レセプションで参加青年と懇談される皇太子殿下



森まさこ内閣府特命担当大臣による主催者あいさつ



日本既参加青年代表スピーチ
田村香子岩手県青年国際交流機構会長



外国参加青年代表スピーチ
ドミニカ共和国リーダー、ルイス・エステバン・プリエト・アビナデル

国際青年交流会議（ディスカッション・プログラム）（9月24日～26日）

「国際青年交流会議」では、カンボジア王国、ドミニカ共和国、ヨルダン・ハシェミット王国、ラオス人民民主共和国、リトアニア共和国、ペルー共和国から招へいされた60名の外国参加青年と、9月にカンボジア王国、ドミニカ共和国、リトアニア共和国の3か国に派遣された日本参加青年等52名を対象に合宿形式のディスカッション・プログラムが実施されました。このプログラムは青年の社会参加を共通テーマとし、環境、教育、文化の各分野についての討論を行うことにより、青年の社会参加への意識を高め、社会活動を促し、国際社会の一層の発展に資することを目的としています。3日間のグループ討論や視察をまとめたディスカッション成果発表会を行い、記念式典後に行われたレセプションには、皇太子殿下の御臨席を賜りました。

環境コース

テーマ：水に関する環境問題とその要因となっている背景に対して青年ができる取組



芝浦水再生センターにて水再生処理についての説明を聞く



環境コースの参加者

教育コース

テーマ：グローバル社会でリーダーシップを発揮できる人材育成に向けて



千葉県立成田国際高等学校にて生徒と交流する



ディスカッションの成果を発表する

文化コース

テーマ：伝統文化を継承するために私たち青年ができる取組



裏千家東京道場にて茶道体験を通して日本の伝統文化を学ぶ



有限会社日伸貴金属にて銀のしおりを作る

地方プログラム

外国参加青年は9月28日(土)～10月6日(日)、3グループに分かれて地方プログラムに参加しました。ドミニカ共和国とラオス人民民主共和国の青年は、石川県と富山県を訪問し、リトアニア共和国とペルー共和国の青年は、愛知県と岐阜県、カンボジア王国とヨルダン・ハシェミット王国の青年は山梨県と岩手県を訪問しました。石川県、愛知県、山梨県では、地元青年との2泊3日のディスカッション・プログラムに参加し、富山県、岐阜県、岩手県ではホームステイを体験しました。



和菓子の包装を体験する(山梨県)



達増拓也岩手県知事を表敬訪問する(岩手県)



地元青年とディスカッションした成果を発表する(石川県)



犬山市立犬山中学校を訪れ、生徒と交流する(愛知県)



世界遺産である五箇山岩瀬家を訪れる(富山県)



杉原千畝記念館を訪問し、ユダヤ人の脱出ルートについての説明を聴く(岐阜県)

第40回「東南アジア青年の船」事業

「東南アジア青年の船」 第40回記念式典・レセプション

本年は、「東南アジア青年の船」事業が、40回目となる特別な年であるとともに、日・ASEAN友好協力40周年でもあることから、これまでの事業を振り返り、今後の東南アジア諸国と日本の相互理解・友好の更なる発展に貢献すべく将来を考えるとともに、関係各国政府及び関係各位に対する謝意の表明と今後の一層の協力を要請する機会とするために第40回記念式典とレセプションとが11月6日(水)に東京・晴海に停泊中のにっぽん丸船内で実施されました。記念レセプションには、秋篠宮同妃両殿下の御臨席を賜りました。



「東南アジア青年の船」事業第40回記念式典

記念式典 14:00-14:30

- 内閣府代表あいさつ
岡田広内閣府副大臣
- 東南アジア諸国連合代表あいさつ
ブルネイ Mr. Dato Hamid Jaafar
文化青年スポーツ省次官
- 共同声明への署名
- 記念撮影



共同声明に署名した政府代表者

記念レセプション 15:00-16:00

- 安倍晋三内閣総理大臣メッセージ
岡田広内閣府副大臣による代読
- 参加青年代表あいさつ
シンガポール Ms. Ng Bao Chern
- 乾杯
松元崇内閣府事務次官
- 懇談



駐日ベトナム大使と歓談する参加青年



駐日ブルネイ大使と懇談する参加青年



駐日シンガポール大使と歓談する参加青年

「東南アジア青年の船」事業について

「東南アジア青年の船」事業は、昭和49年1月のインドネシア共和国、マレーシア、フィリピン共和国、シンガポール共和国及びタイ王国の各国と日本国との共同声明に基づいて始められた事業であり、これら東南アジア各国(これに、昭和60年度からはブルネイ・ダルサラーム国が、平成8年度からはベトナム社会主義共和国が、平成10年度からはラオス人民民主共和国及びミャンマー連邦が、平成12年度からはカンボジア王国がそれぞれ参加)の積極的な参加と協力の下に、日本国政府(内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室)が実施している。

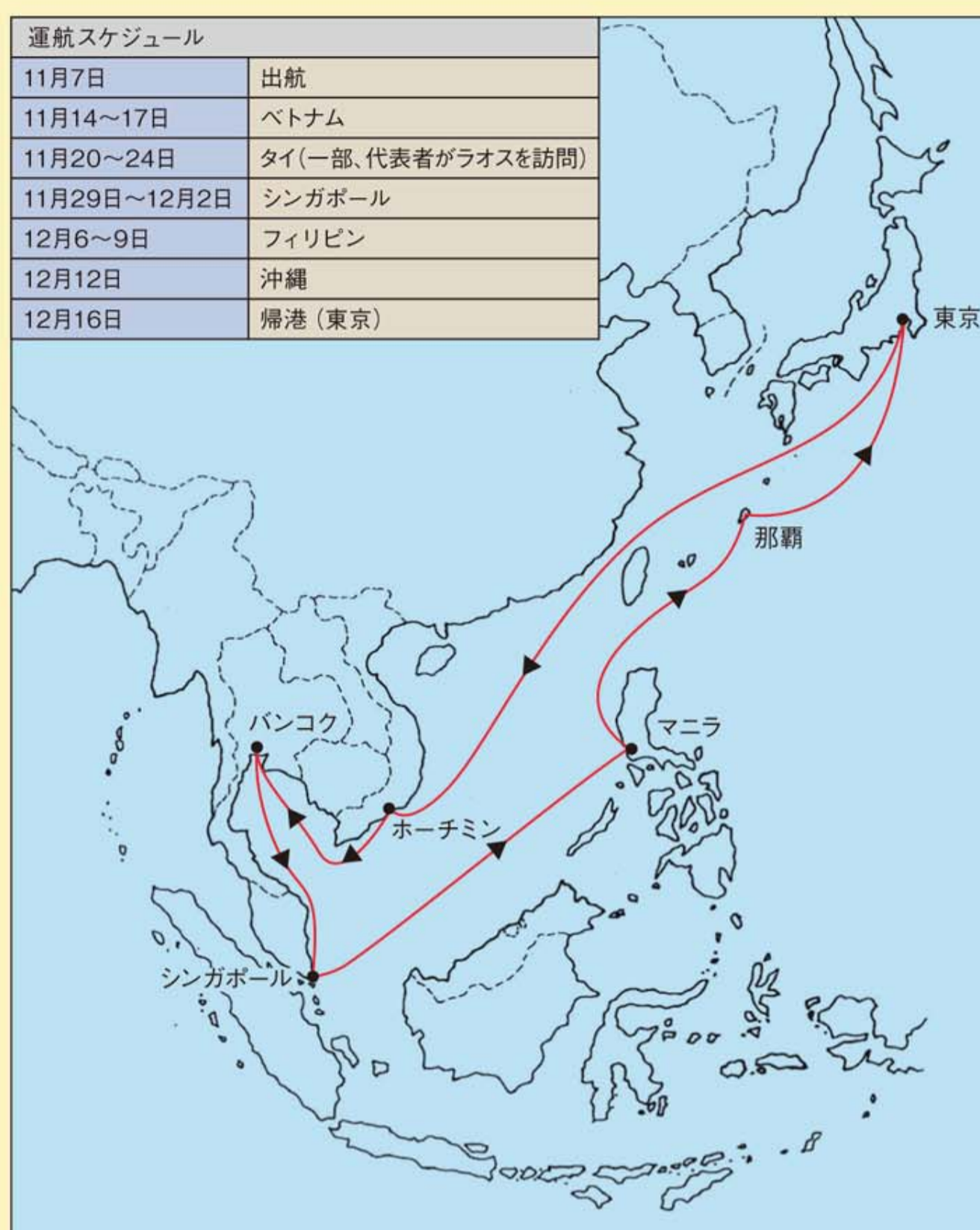
この事業は、日本と東南アジア10か国の青年が、「東南アジア青年の船」に乗船し、生活を共にする中で、各国事情の紹介や討論を行うとともに、船内及び訪問国において各種交流活動を行うことにより、相互の友好と理解を促進し、併せて日本の青年の国際的視野を広げ、国際協調の精神の醸成と国際協力における実践力の向上を図り、もって国際化の進展する社会の各分野で指導性を発揮することができる青年を育成するとともに、青年による青少年健全育成活動等の社会貢献活動への寄与を目的として実施する。

国内プログラム

第40回「東南アジア青年の船」事業は、10月28日より参加者326名(ナショナル・リーダー含む)及びその他事業関係者が来日し、開始されました。

国内活動スケジュール	
10月28日	外国青年来日
10月29日	参集式と歓迎レセプション
10月30日	課題別視察*
10月30日～11月1日	日本・ASEANユースリーダーズサミット (10/31は日本・ASEAN文化交流プログラム)
11月2日～5日	地方プログラム

コース名	課題別視察訪問先
企業の社会貢献	株式会社 パナソニックグループ
異文化理解促進	一般財団法人言語交流研究所 ヒップファミリークラブ
環境(自然災害と防災)	池袋防災館/内閣府(防災担当)
食育	内閣府食育推進室/服部栄養専門学校
保健教育 (HIV/AIDS対策)	東京都エイズ啓発拠点事業 HIV/AIDS情報ラウンジ ふぉー・てぃー/ ぷれいす東京
国際関係 (日・ASEAN協力)	国際機関 日本アセアンセンター/ 特定非営利活動法人開発教育協会
学校教育	品川区立浅間台小学校
情報メディア	NHKラジオセンター/株式会社ドワンゴ(ニコニコ本社)



課題別視察

10月30日は、船内で実施される八つのディスカッショングループのテーマ別に視察が実施されました。



社内で栽培しているトウモロコシについて説明を聴く(株式会社パナソニックグループ)
(企業の社会貢献コース)



日本アセアンセンター大西克邦事務総長より同センターについて説明を受ける
(国際関係(日・ASEAN協力)コース)

地方プログラム

参加青年は11月2日～5日、11のグループに分かれて、11縣市(青森県、宮城県、福島県、茨城県、福井県、奈良県、和歌山県、岡山県、高知県、長崎県、北九州市)を訪問しました。

訪問先では、表敬訪問、ローカルユースとのディスカッション、施設訪問や日本文化体験が実施されました。

また、ホームステイでは、ホストファミリーに温かく迎えられ、日本の日常生活を体験することができました。



ねぶたの里で、ねぶたの運行体験をする(青森県)▶



巨理郡巨理町の仮設住宅を訪問し、太巻き作り体験をする(宮城県)



ディスカッション・プログラムに参加する(福島県)



橋本昌茨城県知事を表敬訪問する(茨城県)



歓迎会にて地元の人々と交流する(福井県)



日本アセアン交流プログラムにて地元青年と書道体験をする(奈良県)



地元青年とぶらくり町を散策し、商店街の活性化について学ぶ(和歌山県)



倉敷の美観地区にて、60年間、水引を手作りしている地元の女性から作り方を教えてもらう(岡山県)



地元青年との交流会で、グループ毎にユニークで創造的なアイデアを出し合う(高知県)



青年自らが取り組める平和教育についてのディスカッションをする(長崎県)



歓迎レセプションでホストファミリーと共に記念撮影する(長崎県)

青少年国際交流事業事後活動推進大会 日本青年国際交流機構第29回全国大会 第20回青少年国際交流全国フォーラム 三重大会

基調講演「伊勢神宮の祭～常若の思想と日本文化～」

神宮司庁広報室長 神宮禰宜 河合 真如氏

日本の神話は化学で構成されている

伊勢の神宮では1,300年の伝統をもって、20年に一度、御宮を新しくして神様をお遷しする式年遷宮の年を迎えています。この式年遷宮の根底にあるものが「常若の思想」ですが、それについて論じる前に、伊勢の神宮とはどういうところなのか、どういう神様がお祀りしてあるのかというところから話を進めてまいります。

私は高校時代は化学をやっておりました。化学の力で世の中を美しく豊かにできないだろうかと考えていたのです。しかし、当時、公害問題に直面しました。飲料水や母乳からも有害物質が検出されるという事態の中で、本当の化学とは何だろうかという疑問に突き当たりました。そうした中で、伊勢の神宮というところがあって、そこには二千年の歴史があり、自給自足の伝統を守り、美しい自然が残されていることを知りました。そうした中で神道とは何かということに興味を持ったわけです。そして、神道の古典と言われる古事記や日本書紀などに目を向けました。そこに書いてあることは、まさに化学的なことで、日本の神話は化学で構築されていることを、私はその時に初めて知りました。

最初に驚いたのが、因幡の白ウサギの伝承でした。ワニを騙して、丸裸にされて傷ついたウサギを大国主の神が救う時に、まずきれいな水で体を洗いなさい、その後、ガマの穂綿にくるまりなさいと教えます。まず、きれいな水で身を整えて、それからガマの穂綿、ガマの花粉のあるものを浴びなさいという意味になります。私はガマの穂の花粉にはフラボノイドという成分があることを知っておりましたので、なるほど、血管収縮作用のある花粉を浴びることによって、血止めをしたんだと分かりました。この神話が語られ始めた時代には、フラボノイドの成分分析はなされていなかったと思いますけれども、日本人は経験値的にそういった医学的知識を身に付けていたんだと驚いたわけです。

また、天上界では、我々の生活に必要なものすべてが執り行われていて、そうした暮らしがすべて地上に降ろされてきたと説かれています。これは実は荒唐無

稽なことではなく、化学的にその成分を分析していくなら、そのとおりということになります。私がこの壇上で立っていることができるのも、骨があり、その骨をカルシウムが形成しているからです。内臓もカルシウ



ム成分によって守られていますし、血が体中を巡るのも、鉄分が血液中に含まれているからです。それらは元素という名前で示されています。一人の人間には約30の生体元素があり、その集合体によって体は造られています。土も木もこの地上のあらゆるものが元素から形成されています。これら元素の故郷をたどっていくと、最終的には宇宙につながっていくわけです。宇宙にはたくさんの星があり、それらの星にも寿命があります。最終的には、爆発し、爆発の折に、元素が宇宙に拡散していく。そして、やがてそれらが融合、結合して様々な形態を生み出していくことになり、この地上にあるもの全てが天上界からもたらされたということは、化学的にも証明されるわけです。

いかなる難問も解決する「祭り」

この神話を突き詰めていきますと、天岩戸開きの神話に行き着きます。この神話は、天上界でこの内宮の御祭神である天照大御神が三つのことをなさっていたというところから始まります。稲作、機織り、神聖な御殿における祭り。いわゆる衣食住の源というのは、高天原という天上界にあったと規定しています。ある日、その暮らしが破壊されます。荒ぶる神様が現れて、機織り、稲作、神聖な御殿を破壊してしまう。すると世の中は、真っ暗闇になったと書かれています。いわゆる衣食住という生活が破壊された時に、世の中は秩序と光を失って、真闇になってしまったのです。天照大御神様はその行いを畏れ、悲しまれ、深い洞窟の中

に入って岩戸を閉じてしまう。まさに不幸の時代が始まったのです。しかし、秩序と光を失った中でも、神々は希望を捨てませんでした。皆が集まって、知恵と力を出し合います。そして、秩序の回復を願って、祝詞を奏上する、一生懸命祈りをこめる祭りというものがここで始められたのです。踊りの上手なアメノウズメノミコトという神様が、一心不乱に舞を舞います。また、力の強い神様、タチカラオの神様はその力でもって岩戸を開けようとします。ニワトリも出てきます。ニワトリは夜明け頃になると高らかに鳴きます。光を、太陽を呼んでくれるトリという信仰があるぐらいです。あらゆるものが祈りを込めて、心を一つに力を合わせたときに、この岩戸は開くんです。祭りの力によって、人々の団結する心によって明けぬ闇はないのです。いかなる問題、難局であろうとも、心を一つに進むならば、必ずや成就するということを神話は示しているのです。

「古語拾遺」という書物の中には、この時に神々の「面」(おも)が白くなったと書かれています。「面」というのは顔のことです。神々の顔が白くなったとは、それまで憂い、沈んでいた神々の心と表情が、光と秩序が回復したことによって、ぱっと輝いたということです。これが「面白い」の語源だということも分かります。面白いとは、単にゲラゲラ笑うことではなく、輝かしい未来が開け、希望がそこに溢れた瞬間の表情であると昔の人々は考えていたのです。ですから、面白い世界を作っていくためには、皆がルールを守って、自分のできる範疇のことを一生懸命しながら、団結していくことに他ならないことを、古伝承は教えてくれているのです。

真心こめて働く日本人の特性

ですから、神話を古い時代の荒唐無稽な話として切り捨ててしまい、その中にある化学性、倫理性を学ばないのは、もったいないことだと思います。日本人は、この天上界で神々がなさっていた行為そのものを「神業」と考えていました。ですから、我々が生きていく上でやっている仕事は全て神様につながる業なのだから、一生懸命手を抜かずにやっついこうという発想が生まれたわけです。

伊勢の神宮では、この神話、祭りに基づく文化、精神を大事にしてきました。年間のお祭りは約1500回ございます。毎日朝と夕に神々にお供え物をして、世の平和を祈る祭りを続けてきました。そして、その祭りに使う全ての道具類は、神宮で作りますし、お供えする「神饌」と言われるお米、野菜果物も、原則的に自



給自足です。それはまさに、神様が我々に与えてくれた神業に他ならないからです。祖先が、神々がなさっていた神業を守り続けることによって、永遠の幸せを未来につなげていくのです。日本の神話は、神々と共に働くところに特性がございます。ですから、日本人に働くことへの強制感はなく、真心こめて、その業に勤しんでいくという発想があります。そういうデータを示すものとして、200年以上続いてきた老舗が世界に7,000あるそうです。そのうちの3,000は日本にある。これは、まじめに正直に、買い手のことを考えて、手を抜かず、その家業を守ってきた成果であろうと思います。そしてその原点には、やはり信仰があるのだと思います。

内宮の天照大御神は、正直の象徴としての信仰を集めてきました。その御神体は御鏡です。鏡というのは非常に正直な物です。その鏡に映る自分の姿は、外観も内面もそのとおりに映し出されます。泣いていれば泣いている顔が映りますし、怒っていれば怒った顔が映ります。ですから、鏡の前に立つように、大御神様の御宮に参拝して、目に見えぬ神に、その鏡に自分を投影するときに、本来自分が気付かなかったものや、自分が正すべき姿、心というものが投影されていくのではないのか。信仰とは神の前に自分をさらすことによって、自分の過ちややるべき事に気付き、それに向かうところにあるのではないのか。そういう信仰を持つ、正直を尊ぶ民族にとって、製品を売ることは、自分の心を売ることに他ならないわけですから、手を抜いたり、むやみに値段を上げようとしたりしなかったがゆえに、信用を勝ち取って歴史を刻んできたのだと思います。

命の根である「稲」

伊勢の神宮では、1500回を数える祭りが行われていると申しましたが、そのほとんどは稲作に関する祭

りです。衣食足りて礼節を知ると言いますが、食べ物がなくなると、不幸なことが起こってしまいます。五穀の豊穰、豊作を祈る祭りを続けてきた神宮も、その部分を最も尊んできました。神様が我々に与えてくれた稲穂を作り続けていくことが、世の中を継続させて命を守ることに他ならないと信じてきたからです。稲は「命の根」という言葉が短くなったものであるとさえ言われてきました。まさに命を守り伝えていくものが、命の根である稲なのです。この稲は、様々な栄養素を含み、山のミネラルによって作られていますので、山の水がある以上、土地は永遠に砂漠化しません。稲作をするためには水が必要です。その水源は、山、森ですから、森林が保護され、育成される。すると、山の水がミネラルを含んで田畑を潤し、海のミネラルいっぱい所では豊かな漁場ができ、貴重なタンパク源をとることができる。そしてその海の水は、太陽の光を浴びて蒸発して雲となり、雨となってまた山を潤していく。永遠の化学です。この季節の循環の中で、春に種を撒いて、秋にその稔りに感謝する祭りを続けていくなれば、環境と自然が保全され、永遠に命が育まれていくのです。

コメをエネルギーとする社会貢献

昔の人はこの米の周期を「とし」と言いました。稲のことを古語で「とし」と言った時代がありました。それは一年二年の「年」です。今は、一年365日5時間48分46秒という単位で示されていますが、もともとは稲作の周期です。田植えから田植え、刈り入れから刈り入れまでの一年間が命を育む「年」であったのです。

日本の文化にも米文化は大きくかかわっています。米を作るためには念じなければいけません。雨があるように、日照りがないように念じ続ける。そこに「禾編」が付くと「稔」という字になります。「禾編」というのはまさに、お米、稲が豊かに実る姿を表しています。ですから「秋」というのは、稲が赤々と炎のように色づくということで、その稔りは神々の恵み、自然の恵みですから、稲穂の「穂」という字は「禾編」に「恵」と書くのです。

そして、米ができることは大いなる喜びでした。「悦に入る」という字を思い出してください。それに禾編が付くと、米ができる喜びと共に「力」をつけてくれるものでし

たから、「税」と呼んできました。米を食べることにより力をつけ、その力を集合していくところに、国を動かす力としての「税」、税金の「税」というものが誕生したのです。もともとは米をエネルギーに、様々な社会貢献がなされており、それが今はお米からお金に変わりましたけれども、その心はまさに神様と共にそれをいただいで、その力を広く社会に使っていくという意味があったのです。ですから、今の世の中も、皆が喜んで税金を納められるような良い国になればよいのです。そうすればとんでもない脱税もなくなって、さらに良い国になっていくはずですよ。この米の力を集めることによって、町々が、国々が栄えてきたのです。

ですから、昔の町の持つエネルギーは、米の取れ高で示されてきました。戦国武将の領地については、十万石とか百万石とか言われますけれど、百万石というのは、百万人の人が一年間食べていくことができる米がとれる、国を動かすエネルギーを持っているということです。ですから、大名たちも、一万より二万、二万より五万というように、一生懸命働いてきたのです。日々の命を未来につなげていくという神業が、稲作を中心として祭り文化を形成し、今日に至っているのです。

なぜ式年遷宮が行われてきたのか

伊勢の神宮では米を作り、野菜果物を作り、塩を作り、日々それを神々にお供えする祭りを続けることによって、過去の物を今に伝え、そしてそれを未来に伝えていきます。常に若々しく瑞々しいことをなしていくということは、一度すればいいのではなく、連鎖の中で初めて意味を持つものだという事を、伊勢の祭りは示しています。

この日々の連鎖の中で、伊勢の神宮では、10月に神嘗祭という大きなお祭りをします。これはその年に実った初穂、新米を感謝の心で神様に捧げ、さらなる永遠を祈る祭りです。神様から与えられたお米が今年もこんなに稔りましたと感謝を込めて、お供えをし、未来



へ伝えていこうという覚悟とともに、神々にそれを御誓い申し上げます。このお祭りの時には、祭器具類というお祭り道具類が一新されます。しかし、御社殿は新しくなりません。ですから、その神嘗祭の拡大版として



式年遷宮が位置づけられています。式年とは、定められた年という意味です。例えば、小学校の卒業式は六年、成人式は二十年というように定められた年の中で物事が行われていくことを指します。この式年を伊勢の神宮では二十年と決めました。式年遷宮は、二十年に一度、御宮を新しくして、神様をお遷しする究極の感謝の祭りです。伊勢の神宮の歴史は二千年、式年遷宮の歴史は千三百年です。式年という二十年に一度という意味で制度化されてからは、今回で62回、約千三百年になります。なぜこれが行われたのかの定説はありませんが、私はこう推定しております。千三百年前、天武天皇の御代、天皇がこれを御発案され、次の皇后であられた持統天皇の御代に、第一回の式年遷宮が挙行されました。この時代、中国大陸の方から様々な文物が導入され、既に法隆寺を建てる文化、礎石を築き、瓦を載せる永久的な建築技術が導入されていました。しかしながら、あえて古い形態を持つ伊勢の神宮を、なぜ作り替えながら維持していこうと思われたのか。やはり日本の国の根幹、命にかかわるものという意識が天皇の中にあられたのだと思います。伊勢の神宮の社殿の原型は、お米などを保管していた蔵です。命の根を保存していくための蔵です。今日も蒸し暑うございますが、この気候の中で食べ物を保存するためには、床を上げて風通しを良くし、動物たちが来て、中の物をあさらないように、柱で高くしておく。水害にもその構造は耐えることができます。横板壁で屋根を載せることによって、雨が降ってきたら木が膨張して中に雨風を入れません。乾燥してきたら、含んでいた水分を放出することで、天然のエアコンディショナーの働きをしていたのです。米を中心とする、瑞穂の国の美風が生んだ建物は、まさに機能と美に満ち溢れたものであり、神様を祀るにふさわしい御殿ともなりました。まさに天照大御神の神業を示す建物であり、信仰とともに機能を追求してきた歴史があるのです。そうしたものを残すことによって、国のアイデンティティ、精

神文化を伝えようとしたのではないかと思います。20年に一度、建物を遷し替えるということは、非合理的に見えるかもしれませんが、この神事が続いたことによって、古い形態が、精神と規律が、今に若々しく瑞々しく伝わっているのです。

繰り返しの美学

パルテノン神殿は、かつては神を祀っていましたが、今では神は失われています。エジプトのピラミッドも、巨大で神秘的な建築ですが、なぜ造られたかということさえ、分かっていません。本当の意味での迷宮になってしまっています。永遠を象徴する岩石でできた社殿が風化し、廃墟となっていく中で、伊勢の神宮は草と木でできています。どちらに耐久性があるかは言うまでもありません。伊勢の神宮は、祭りを繰り返すことによって、永遠性を保ち、常に若々しい姿を見せているわけです。繰り返すことによって、永遠を確立する。私はこれを「繰り返しの美学」と言いますが、永遠とは直線的に何かを成し遂げるのではなく、円のように繰り返していくことによって、強靱な魂と技術とともに伝えられていくのです。神宮の山々が美しいのも、草木が永遠にそこで命を保っているからではありません。繰り返し、繰り返し、連鎖することによって保たれているのです。一度行って、一度作ったら終わりではなく、それを作り続けていく精神を老化させないこと、これが「常若の思想」なのです。

式年遷宮も、先人達が日々の感謝を忘れず年々の祭りを続け、式年に一度、神を意識し真心をこめて行ってきたことによって、過去が今に、そして未来へつながっているのです。本当の幸せとは何かと考えるのならば、永遠の今の中にいる自分をしっかりと心の鏡に投影して、どう生きていくか、何を正していくかということを決めれば、天の岩戸開きの再現が行われ、世の中は永遠に美しく豊かに、面白くなっていくものなのです。



平成16年度より、内閣府青年国際交流事業の参加経験がある在日外国青年を中心とした講師を日本の学校等に派遣して、国際的な視野を持つ青少年の育成に貢献しています。平成25年度第3回・第4回の国際理解教育支援プログラムが実施されました。

■平成25年度 第3回

日付	平成25年8月1日(木)・2日(金) 各日3回(60分)×2日間
実施先	ギャラクシティ - こども未来創造館
担当者	氏家豊館長、山本良子様
対象	小学生及び未就学児4~5歳対象
プログラム	ものづくりを通じてハワイの歴史と文化を学ぶワークショップ
派遣講師	Ms. Cameron Nitta (アメリカ合衆国・ハワイ)

■受入担当者の感想

ギャラクシティ こども未来創造館 こども体験事業企画運営推進チーム：山本 良子

「ギャラクシティ」は平成25年4月1日にリニューアルオープンした子どものための足立区立の文化施設です。国立天文台ハワイ観測所と提携したプラネタリウムのプログラムを行っていることから、8月に「ハワイウィーク」としてハワイに関連する多数のイベントを企画しました。国際理解教育プログラム「ハワイについて知りながらハワイアン・スタンプ・カード&ムーニー・カードづくり」は、一般財団法人青少年国際交流推進センターに御協力いただき、開催することができました。施設の特質上、未就学児から小学6年生まで幅広い年齢の子ども達が同時に参加するプログラムであったのですが、講師としていらっしゃったCameron Nitta先生は、皆が楽しんで参加できるよう、非常に親しみやすい内容を考案してくださいました。限られた時間でしたが、参加した子ども達が皆、初めて知るハワイの様々な事柄に終始目を輝かせている姿が印象的でした。保護者の方からも「子どもの初めての異文化体験がとても楽しいものとなった」などの感想が寄せられ大変好評でした。今後も推進センターの御協力を得ながら、子ども達に向けた国際理解教育プログラムを実施していければと思っております。



ハワイのCameron Nitta先生より、ハワイの歴史・文化についての話を聞いた後に、カードづくりの説明を受ける



ハワイアンカード



■平成25年度 第4回

日付	平成25年9月7日(土)
実施先	東京都杉並区立桃井第一小学校
担当者	学校支援本部 土曜日学校運営委員会 石橋由香様
対象	桃井第一小学校の1~6年生の児童で、「桃一キッズ」への参加を希望した児童約50名
テーマ	外国人講師による異文化紹介
派遣講師	Mr. Kosit Tiptiempong (タイ) Ms. Hong Yejin (韓国) Ms. Andrea C Avalos S (メキシコ)

■講師の感想

Ms. Andrea C Avalos S (メキシコ)

私が日本に住んで感じることは、多くの日本人は、地理的な遠さや文化の違いのため、メキシコについて限られた情報しか持っていないということです。児童は好奇心旺盛で学習意欲も高いので、このようなプログラムを通じて異なる世界を知り、更に興味を示していくのだと思います。

プログラム当日は、1年生から6年生までの児童に難しすぎず、簡単すぎないバランスの良い授業を行わなければいけないという思いから、最初はとても緊張しました。でも、児童たちはきちんと話を聞いてくれました。メキシコ版ビンゴを教えた時、ゲームの説明に十分な時間を割くことができなかつたものの、ある男子児童が自分の家族に教えたのもう一枚ビンゴシートをくださいと言ってくれました。とても嬉しかったです。

このようなプログラムが継続して実施されることを望みます。ときとして、我々講師は教えること以上に児童から多くのことを学ぶ機会をもらっているのです。講師としてプログラムに参加できたことに対し、桃井第一小学校と推進センターの皆様へ感謝します。ありがとうございました。



Kosit先生とタイ版ハンカチ落としの歌をタイ語で練習する



Andrea C Avalos S先生のメキシコ版ビンゴに夢中になる児童

◆問合せ先

国際理解教育支援プログラム担当：田中 佐代子・大久保 正美 E-mail: iuesp@iyeo.or.jp Tel: 03-3249-0767

IYEO自主活動サポート助成金制度(チャレンジ・ファンド)を活用した活動

日本青年国際交流機構では、平成23年度から「自主活動サポート助成金制度(チャレンジ・ファンド)」を設けました。これは、私たちの団体の人的活力をさらに社会に提供すること、また団体として活性化を図ることを目的としています。

平成25年度前期は7件、後期は2件が採択されており、既に終了したうちの2件を紹介します。

チャレンジ・ファンドの詳細はこちらをご覧ください⇒ <http://www.iyeo.or.jp/ja/profile/challengefund.html>

第38回「東南アジア青年の船」事業既参加青年による事後活動

第2回J-SSEAYP

テーマ：東南アジアとのビジネスを円滑に進めるポイントをつかむ
—ASEAN諸国で協働できるグローバル人材へ!—



2013年9月28(土)・29日(日)の2日間、国立オリンピック記念青少年総合センター(東京・代々木)で、東南アジアの青年と学ぶ、1泊2日の国際交流プログラム第2回J-SSEAYPを開催しました。当日は、プログラムの共通言語を英語とし、社会人を中心に27名(日本人21名、東南アジア出身者6名)が参加しました。

スケジュール

9月28日(土)	
14:00~14:10	開会式
14:10~14:30	アイスブレイキング
14:30~17:00	「ストーリーテリングでお互いを知る」英語ワークショップ 講師:辰野まどか氏(「東南アジア青年の船」事業既参加青年/ 「GiFT」事務局長)
17:00~18:30	チェックイン、夕食
18:30~21:30	ケーススタディ テーマ:日本食の店舗を東南アジアで成功させるには -6チームのお題 ミャンマー×たい焼き/ミャンマー×おでん/インドネシア×おにぎり インドネシア×たいやき/フィリピン×おにぎり/フィリピン×おでん
9月29日(日)	
9:00~10:00	ケーススタディ発表会
10:00~10:30	審査発表と振り返り -総合優勝チームは「T2」 ミャンマー×たい焼き
10:30~11:00	講演:日本とマレーシアでのビジネスについて 講師: Alif Asraf Kamarun Zaman氏 (「東南アジア青年の船」事業既参加青年)
11:00~11:10	閉会式
11:10~12:00	フェアウェル・パーティー



自分の考えを出し合って議論する(ケーススタディ)



「おでんを東南アジアに普及させる戦略について」
(ケーススタディ発表会)



全体の様子(ケーススタディ発表会)

第2回J-SSEAYPを開催して

実行委員長:北 裕介

昨年に続き、第2回J-SSEAYPを開催いたしました。今回のねらいである「価値観に起因する労働観の違いを理解し、ASEAN諸国でイニシアティブをとれるビジネスパーソンの創出」に対して、多くの気づきを得て熟慮を重ねたことから、参加者同士の濃密な議論の場を提供できたのではないかと考えています。今回は、特に若手の社会人を対象とし、お互いの価値観や労働観の違いに気づくことに焦点を当てました。

初日は、お互いの相違点に気づき、理解することが重要であると考え、参加者は、辰野まどか氏が紹介したストーリーテリングという手法を用いてディスカッションを行いました。これにより、参加者同士の思考や言動を知るという場を構築でき、活発な議論が展開されました。

次はチームとして「日本食を東南アジアに進出させて成功させるには」をテーマに、ケーススタディを行いました。お互いの理解が深まった中で、いかにチームとして協働できるかを試す実践的な機会を用意しました。限られた時間や情報の中で、時にはチーム内で対立や激しい議論も起こりつつ、チームとして共に目標を達成しようとする姿勢が強く感じられて、各々がイニシアティブを発揮していました。

ケーススタディの発表会では、チームを超えて全体で一つにまとまっているように見えて、アジア人材として個々の能力を発揮しつつ上手く協働できたと感じました。

この2日間のJ-SSEAYPで参加者が何か新しい気づきを得られたら幸いです。



第39回「東南アジア青年の船」事業既参加青年による事後活動 課外授業～未来の自分を想像しよう～

2013年11月18日、第39回「東南アジア青年の船」事業の既参加青年23名が、一青年の母校である三重県四日市市の学校法人暁学園にて154名の生徒を対象に「課外授業～未来の自分を想像しよう～」を実施しました。既参加青年は、事業を通じて、「多様性」の大切さや多様性を有する社会が持つ「可能性」を学び、さらに、このような社会を創るためには、一人一人が持つ「違い」や「個性」を尊重し、いかすことが必要であると考え、授業を行いました。授業では、本事業で感じた多様性を紹介し、プレゼンテーションを通じて一つのロールモデルとなる生き方を高校生へ提示し、自らの人生の選択肢を広げ、個性をいかして社会に積極的に参画する人材を増やすことをねらいました。

バイタリティ溢れる授業

学校法人暁学園

暁中学校・高等学校 第4学年主任 行方 一也

遠路はるばる三重の地まで足をお運びいただき、誠にありがとうございました。

今回は、本校で行っている総合的な学習の時間「人間たれ」の一環としての実施でした。

効果的であったと感じられる点は二つあります。冒頭で本校卒業生によるビデオレターで受講者の気持ちをつかんだところ。身近な人が国際的な活動に参加しているという点に多くの生徒が興味や関心を抱いたと思います。そして、手際の良いプレゼン後に、生徒と青年たちのコミュニケーション活動によって大いに盛り上がり、授業を活発にさせていました。

どこかよそごとのように考えがちな国際社会や国際的な活動をぐっと身近に感じさせてくれた今回の取組は、今後もぜひ、続けていただけると幸甚です。



既参加青年のプレゼンテーション



プレゼンテーションを聴く高校生

成果と感想

「東南アジア青年の船」事業の意義と魅力を理解し、「生徒たちには色々な機会を与えたい。選択肢を広げてあげたい。是非お願いしたい」と積極的で開放的な姿勢で快く我々を受け入れて下さった暁高等学校の教職員の方々に心から感謝の意を表したい。

オープニング映像を、目を輝かせて前のめりで見つめていた女子生徒の姿、プログラム終了後、「声楽家になりたい。猛烈に練習することに決めた」と得意気に話してくれた男子生徒の笑顔が次なる活動への原動力となるだろう。今回のプログラムが一人でも多くの高校生にとって自らの希望と夢を見つめ、その実現のための一歩を踏み出す契機となれば幸いである。

また、我々にとっても大きな一歩となる日であった。事業終了後、各々が忙しい毎日を送っているにもかかわらず、当日は23名がかけつけ運営にあたった。事業の間は裏方に回ることが多かった者が発表者を務めるなど、仲間の新たな姿を見る機会にもなった。教職員からも「すばらしいチームワークだった」と評価をいただき、我々の絆の深まりを実感し、個々の強い主体性を再認識することができた。終了直後に改善点や反省点を積極的に言い合う中で感じたのは、「終わり」ではなく「ここから始まり」という雰囲気であった。「この仲間と次は何をしようか、次は一体どんなことができるのだろうか」という期待感と共に初回を締めくくることができ、嬉しく思う。

実行委員長 田畑 尚子



今月の表紙

スリランカ教育支援プロジェクト「One More Child Goes To School」の奨学生(1年生・男子)の作品。多民族・多宗教のスリランカでは、文化的には仏教の影響が最も大きな国であり、国内には多くの仏教寺院があります。僧侶はとても身近な存在で、仏教徒は人生の節目を僧侶に祝福してもらうほか、子どもたちは日曜日には、お寺で僧侶から仏教の教を学んでいます。



編集後記

マクロコズムの表紙は、スリランカ教育支援プロジェクトで支援している子どもたちが描いた作品です。先日、このプロジェクトのメンバーがスリランカを訪れ、表紙の絵を描いた子どもたちにマクロコズムを手渡してくれました。子どもたちは自分の絵が表紙になったマクロコズムを見て、ちょっとびっくりしながら、喜んでいただけたとのこと。いつもどんな子がこの絵を描いてくれるのだろうと思っていたので、子どもたちの様子が聞けてうれしくなりました(ふ)

MACROCOSM 1月号 vol.104

2014年1月6日発行

編集 マクロコズム編集委員会

発行 一般財団法人 青少年国際交流推進センター
〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町
2-35-14 東京海苔会館6階

TEL: 03-3249-0767 FAX: 03-3639-2436

e-mail: macrocosm@iyeo.or.jp

URL: <http://www.centerye.org/> (CENTERYE)

<http://www.iyeo.or.jp/> (IYEO)

編集協力 内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室

日本青年国際交流機構 (IYEO)

定価 200円 本体191円

印刷所 株式会社デックス

TEL: 03-3400-8089 FAX: 03-5469-5270



「」花咲く、ステキな旅を。

支店名	電話番号
札幌支店	011-221-0821
青森支店	017-723-3671
盛岡支店	019-651-8800
仙台支店	022-263-3232
秋田支店	018-866-0109
山形支店	023-641-4141
福島支店	024-523-4451
水戸支店	029-224-6627
宇都宮支店	028-636-7761
高崎支店	027-325-3201
さいたま支店	048-640-1009
千葉支店	043-243-0109
ストリームライン 新宿支店	03-5348-3500
横浜支店	045-326-1120
甲府支店	055-222-0381
新潟支店	025-243-1515
富山支店	076-431-7638
金沢支店	076-233-0109
福井支店	0776-23-2800
長野支店	026-226-4315
岐阜支店	058-263-4657
静岡支店	054-255-1919
名古屋支店	052-232-1091

支店名	電話番号
三重支店	059-221-3331
滋賀支店	077-565-0109
京都支店	075-361-5351
大阪支社第2営業部	06-6344-3927
神戸支店	078-221-1090
奈良支店	0742-23-2371
和歌山支店	073-425-3211
鳥取支店	0857-23-2001
松江支店	0852-21-5425
岡山支店	086-225-1746
広島支店	082-545-1090
山口支店	083-972-5454
徳島支店	088-622-8991
高松支店	087-851-6666
松山支店	089-941-9231
高知支店	088-825-0109
福岡支店	092-739-0010
佐賀支店	0952-26-1131
長崎支店	095-827-4151
熊本支店	096-354-5765
大分支店	097-538-1091
宮崎支店	0985-25-6111
鹿児島支店	099-257-0109
沖縄支店	098-868-8822

国際会議から出張まで、
お問合せは、上記支店またはお近くのトップツアー各支店へ

お客様満足度100%+αを追求するサービスマインド。

お客様の立場になる「想像力」、プラスアルファを創る「創造力」。

50年の実績と豊富な情報力を駆使して

高品質・高付加価値の商品とサービスを提供するトップツアー株式会社。

私たちは、旅を通じて新しい出会いと感動を創出する

[旅行インテリジェンス企業]です。



トップツアー株式会社

観光庁長官登録旅行業第38号 日本旅行業協会正会員・ボンド保証会員
〒160-0023 東京都新宿区西新宿7-5-25 西新宿木村屋ビル16階

<http://www.toptour.co.jp>

国際旅行事業部 ストリームライン新宿支店

03-5348-3500





撮影：三好和義



新しいことは雪解けとともにやってくる

吐く息はまだ白いけれど船から見える、海も空も街も

少しずつ、春の装いを始めています。

雪が溶けて、見つけたばかりの春を味わう口福も、この季節ならではの。

この眩しいほどの新しい世界に一步踏み出すのは今。

にっぽん丸で、春を味わいに行きましょう。



○詳しいパンフレットをご用意しています。最寄りの旅行会社または、下記へお問い合わせください。

商船三井客船 クルーズデスクフリーダイヤル 9:30~17:00(土・日・祝はお休みです) 〒107-8532 東京都港区赤坂1-9-13 三会堂ビル5階
☎0120-791-211 <http://www.nipponmaru.jp>